

発行日
令和7年3月31日
編集・発行
春日井市道風記念館
春日井市松河戸町5-9-3
電話 0568-82-6110

道風記念館だより
第74号



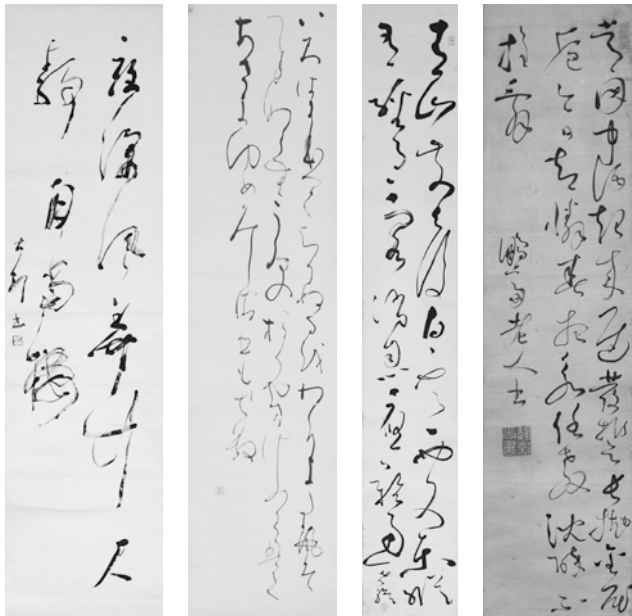
とうふう

【展覧会案内】 館蔵品展 一回性の美学

筆で書いた一本の線の軌跡が「書」です。いちど書いた線の上から線を重ねて修正することは基本的にありません。二度と同じ作品が生まれたいのはもちろん、一点一画すべてが一回きりのものなのです。そして書は、その筆脈を多くの人が共有できるところに大きな特徴があります。書には筆順があり書き直しをしないため、鑑賞者が筆の動きを読み取り、時間

一点一画すべてが一回きり。

その潔さが書の魅力。



の経過をたどって作品が仕上がる様を追体験することができます。たとえ古い時代に書かれたものからでも、書いた人の息づかいを感じる事ができるのです。館蔵品展「一回性の美学」では、筆の動きを読み取りやすい行書・草書の作品や、淡墨で書かれた作品を中心に展示します。書においての「一回性」という特徴をこころに留めながら作品を鑑賞してみてください。書のおもしろさ、奥深さを感じるきっかけとなれば幸いです。

会期 令和7年4月23日(水)～7月13日(日)
観覧料 一般：100円、高校・大学生：50円、
中学生以下：無料

休館日 月曜日(祝休日の場合は翌日)

展示品解説 5月10日(土)・6月1日(日)

① 10時30分～11時 ② 14時～14時30分

展示品の作者一覧

- 細井広沢 亀田鵬斎 巻 菱湖 丹羽海鶴 服部擔風
- 豊道春海 川村驥山 清水比庵 藤岡保子 長谷川流石
- 林 楽園 仲田幹一 手島右卿 野中鳴雪 堀 桂琴
- 藤田東谷 伊藤参州 松田江畔 宮本竹逕 坪井正庵
- 中林子鶴 井野吟紅 長谷川牧風 山川昌泉 武内幽華
- 中村立強



- 4 1 亀田鵬斎
- 2 川村驥山
- 3 藤岡保子
- 4 手島右卿
- 5 藤田東谷

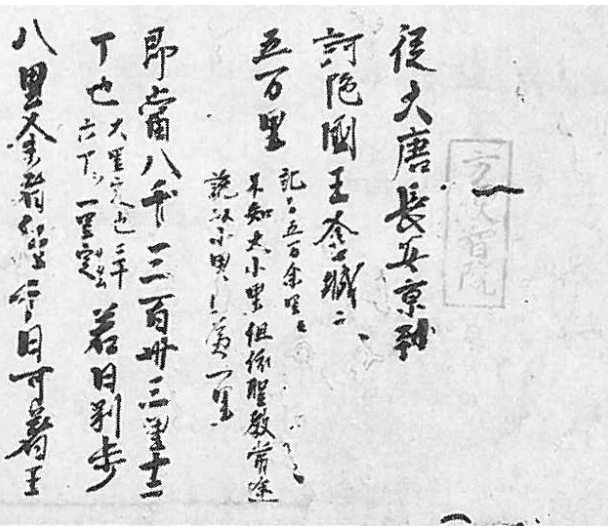
明恵

古谷 稔

明恵（一七三—一二三二）は鎌倉時代の僧。京都・高山寺の開山である。法諱は承元二年（一一〇八）三十六歳頃までは成弁、同四年頃から高弁と称された。明恵は法号。

紀伊有田郡の人。父は平重国で高倉院の武者所に仕えた人物。母は有田郡一帯に勢力をもった湯浅宗重の女である。母方の叔父に真言僧侶で歌人であった上覚（高雄山神護寺の文覚に師事）がいる。八歳で両親に死別して神護寺に入山した明恵ととって、上覚は庇護者であり師でもあった。十六歳で東大寺戒壇院にて具足戒を受けた明恵

図1 明恵筆「大唐天竺里程書」（高山寺蔵）



は、その後同寺尊勝院の林觀房聖詮から俱舍論や華嚴などを学んだ。青年期における明恵は、高雄と東大寺の間を歩き来し、尊勝院に寄宿して華嚴経について修学したといわれる。だが、門閥にとられた南都寺院の修行に疑義を呈し、生母湯浅氏の援助を受け、紀伊有田郡に草庵を建立、同地での修行修学に励むに至った。三十四歳の時、後鳥羽院より高雄の奥、梅尾の地を賜わり、高山寺を建立して華嚴の道場と成した。

明恵は末世濁世に生を受けたことに起因し、釈尊追懐の念を心底にとどめ、実際に聖地インドへの渡航を生涯二度も企てたが、この計画は、春日大明神の神託により中止をやむなくされた。

【図1】は明恵筆「大唐天竺里程書」（一幅・高山寺蔵・重文）である。明恵は早くから自ら仏陀の遺跡を巡礼して如来在世の本意を確信したいと念願していた。この里程書は、その所願を書き示したものであり、大唐長安京より摩訶陀国王舍城への行程を書き記した意欲あふれる記載と窺える。明恵の書は、一般的には漢字仮名交じりの書が多く残され、和様の趣であるが、この里程書の書風は、宋の漢字書法を窺わせる。

明恵の弟子・恵日坊成忍の作と伝えられる国宝「明恵上人像（樹上坐禅像）」（高山寺蔵）一幅の絵に加筆した明恵自筆とされる賛の書は、まさにこの「大唐天竺里程書」と同筆と思われ、宋書風の影響下によるものと推察される。平安末期から鎌倉にかけて、書道史において、中国の宋の書が日本の書に影響を及ぼしたことは、すでに容認されている。

一方、【図2】明恵筆「書状」（一幅・陽明文庫蔵・重文）の文面は詳らかでないが、上蓮御房に

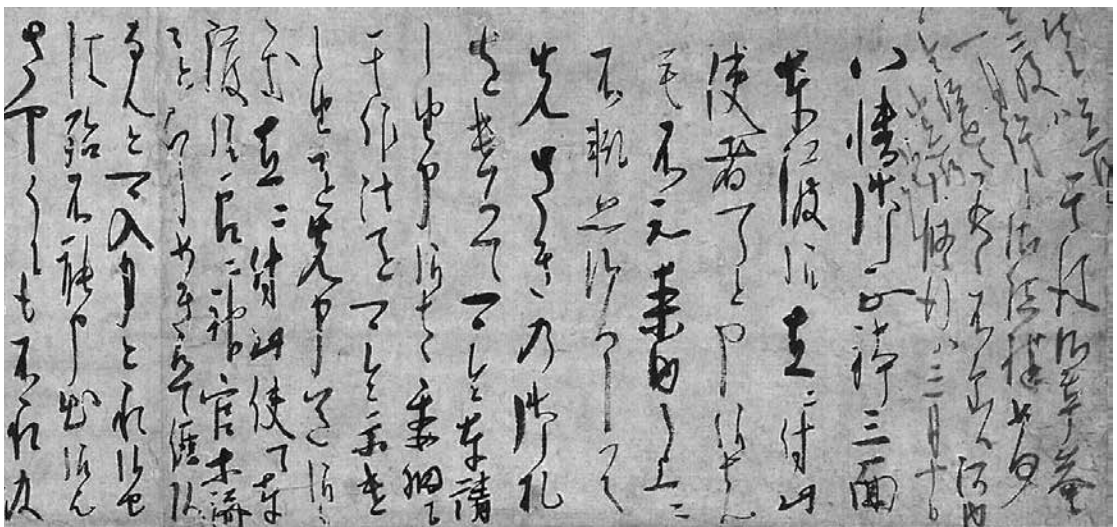


図2 明恵筆書状（陽明文庫蔵）部分

全京城、
 百里、
 以計之百里、
 千里、
 近百里、
 若每年日教必三百、
 十月、
 長安京至第三年十月、
 十月、
 若日別步七里一千百、
 三十日、
 二月、
 若、
 十日、
 六百、

宛てたもので、二月六日の日付に「高弁上」(高弁たてまつる)の署名を付す。石清水八幡宮の御正体である鏡三面を、上蓮房上西のもとに使者に託して送り届けた様子が垣間見られ、石清水宮に明恵が滞在中の筆と見なされている。
 「八幡御正体三面奉渡候云々」と、懐の大きい文字構えとともに、力強く堂々とした和様書風である。墨の濃淡や、筆圧の強弱にも工夫が凝らされ、本文の書き始めから末尾に至るまで、運筆は滞ることなく、さらに冒頭の文面末尾にあたる返し書き「其後御草庵云々」にも精細な神経が注がれ、書状全体に漢字書法に裏打ちされた明恵ならぬ、
 一 同夜夢記
 有人致書于予云、予、
 一 同夜夢記

図3 明恵筆夢記(陽明文庫蔵)部分

ではの見事な書が体現されている。
 これに加えて、明恵の生涯において、「夢」の存在が注目されている。明恵にとつて、夢はすべて記述されるもので、覚醒時の体験と等しい価値を有するとの認識がなされている。

【図3】の明恵筆「夢記」(一巻・陽明文庫蔵・重文)は、書状よりもさらに自由で柔和な趣で書き連ねた書風を展開する。明恵の十九歳から晩年にわたり四十年間もの長きにわたり、書き続けたもので、現存する遺品は諸家に分蔵される。

本巻の部分に注目すると、ある夜の夢に明恵自らの傍らで女房が顔を覆って哭したり、また、東大寺と覚しき所にある塔の近くに大仏より巨大な女像に接したことなど、奇怪な夢の情景を描き記している。詳細は略するが、「夢記」は明恵の書における大きな存在を示している。

書状とは異なり、本書は漢字片仮名交じりの書である。片仮名表記は意外に読みやすく、実用的である。この時代には多くこうした遺品が目につく。たとえば、国宝「高信筆・明恵上人歌集」(京都国立博物館蔵)や重文「片仮名本方丈記」(大福光寺蔵)などは好例といえよう。

明恵は古来、能書としての名は無いが、その書は豊かな書法の中に、高潔な人柄を忍ばせるものがある。明恵の弟子は血脈類に定真・靈典のほか、喜海・高信・道澄・定恩・円弁・隆長・弁清・顯晋・淨弁・貞真・証定・了弁・性実らを探り上げ、これらは「明恵山脈」と見なされている(奥田勲著『明恵 遍歴と夢』東京大学出版会)。今後、これらの人々の書を見出し、改めて明恵自筆本と対比して鑑賞する機会を得たいと願っている。

(東京国立博物館名誉館員 ふるやみのる)

